

NPO 法人 底上げ 年間活動報告書

2012年5月－
2013年3月



1年間の活動報告書ができました。

今回の報告書は僕らにとっては少し特別。

登記を完了しNPO法人底上げが誕生してから一年を意味します。祝！1歳です。

特に以前と変わったことはないですが、それでも背筋が伸びるような想いです。

気仙沼に移住し、活動を始め1年後、

僕ら自身の生活もままならぬまま2012年5月にNPO法人底上げが産声をあげました。

その後、現地のニーズに合わせて様々な活動を展開。

気仙沼と、地域を結び、1017人のボランティアが参加。

地元の子どもたちも出会った時とはくらべものにならないほどたくましくなり、笑顔が増えました。

決して大きいことを成し遂げたわけでもなく、何かを劇的に変えたわけでもない僕らですが、

地元に着し、多くの方に支えられ一年を迎えることができました。

そんな僕らの汗くさい一年間の記録。どうぞご覧ください。

感謝の気持ちをこめて。

NPO法人底上げ代表理事

矢部寛明

INDEX

1-2

気仙沼の今

3-16

各プロジェクトの一年

17

メディア露出

18

収支報告／寄付のおねがい

19

サポーターからの声

気仙沼の今



出典 気仙沼市役所 気仙沼市公式 web サイト
<http://www.city.kesenuma.lg.jp/www/contents/1300452011135/>

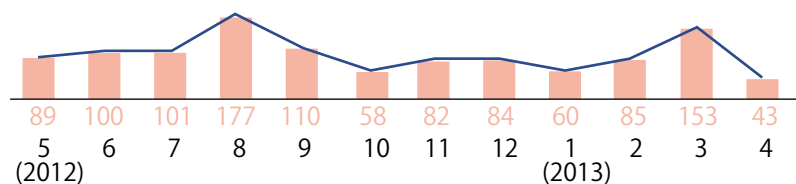
●気仙沼市データ●

気仙沼市の全人口は 68,752 人 (25,621 世帯)。震災前と比べて 5000 人減。
 気仙沼市内での高台移転計画が難航する中、より内陸の街へと移り住む人が多いといわれています。

●ボランティア

現在までのボランティア総数は市内全体で約 55,000 人。震災から 2 年がたった今、ボランティアの人数は毎月減り続けています。作業そのものが減少していることもあり、月日と共に世間の被災地へ向ける意識が薄れて来ているという感覚もあります。しかし私たちは現地での活動をしながら、復興はまだまだ遠い事を肌で感じています。現地の方と話していると、「被災地のことを忘れないでほしい」という声が多く聞こえます。これからも少しでも気仙沼全体が盛り上がるような働きかけをしていきます。

底上げボランティア 一年間の推移 2012/5~2013/3 合計 1,017 人



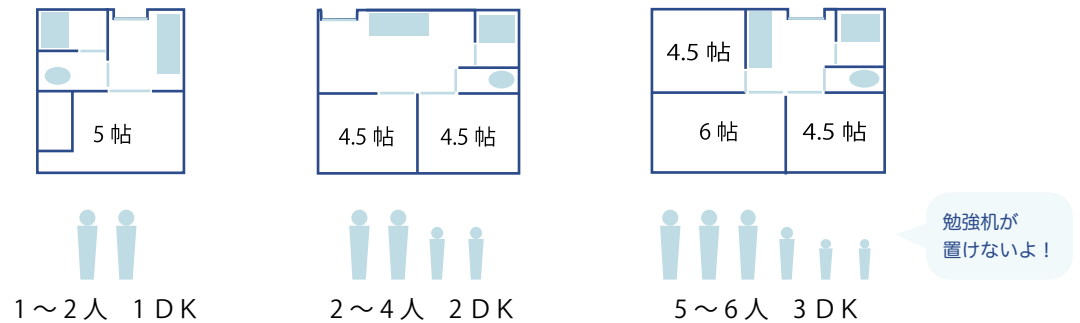
リピーター率 30%!

●仮設住宅で生活する人々●

底上げは地域の子供達へ向け学習コミュニティ支援などの活動をしています。それらを始めたきっかけは、震災により市内の中学校の校庭や公園に仮設住宅が建設され、子供の集まる場所が失われてしまった現状を目の当たりにしたためです。市内の中学校 13 校中、11 校の校庭に仮設住宅が建っています。また今でも気仙沼市で仮設住宅に住む人は、民間アパートなど「みなし仮設」を合わせると全市民の約 2 割に当たる 11300 人にのぼります。しかし高台移転計画などが難航し、この 2 年間で退去したのは 426 世帯のみ。仮設住宅での暮らしをこの先も続けなくてはならない子どもたちもその親も、いまだ多くのストレスを抱えて生活しています。底上げへ来るボランティアと地元の方の交流の場をつくることで少しでもその精神的負担をやわらげ、日々の生活に希望がもてることを目指して今後も活動してゆきます。

●仮設1戸分の平均的な広さ

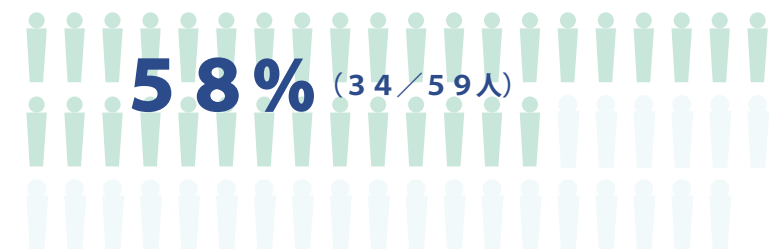
もちろん例外はありますが、一般的なコンテナタイプの仮設住宅の間取りです。家族一人一人のプライベート確保が難しい広さです。



また、仮設住宅にはいろいろな地域から来た人が生活しています。そのため既存のコミュニティが存在しないところが多くあります。底上げが学習コミュニティ支援を始めた当初、仮設住宅に接する集会所での活動により周囲の大人も自然にあつまり、仮設住宅内のコミュニティ再生の助けになればという思いもありました。

●学習支援に参加している子の仮設住宅在住率

底上げが活動している海に近い地域は仮設住宅で生活する子どもが特に多く、全体の 58% にのぼります。



ボランティアコーディネート

ソコアゲ

概要

一人でも多く、まずは被災地に直接来て、見て、感じてもらう。それを大切にしながら、底上げは短期・長期、または個人や団体に関わらずボランティアの受け入れを行っています。気仙沼で共に行動し、地元の方と触れ合い、様々な思いを共有する時間を作り、より多くの人に「被災地」という問題について意識を向けてもらうよう努めています。

日時：随時

場所：主に気仙沼市内

参加者数：延べ 1017 人

2013.1

2012/5

6/7 - 6/19

1週間スイス人3名の中期ボランティアの受け入れを行う。他にも多くの外国人のボランティアが底上げを通じて気仙沼に来てくれた。

8/2

岡山県西大寺中学校8人、兵庫県灘中学高等学校16人合同で、地元の人話を聞いた後、交流会を実施。翌日には市内のゴミ拾いも行う。

8/1 - 8/31

学生の長期休暇期間に、市内3か所で同時に展開した学習支援の協力ボランティアとして大学生30名を誘致する。

12/27

東京都田園調布双葉高等学校24名の受け入れを実施。地元高校生が町案内をした後にテーマを決めてのダイアログのワークショップを行う。

2/1 ~ 3/31

大学生の長期休暇期間中の短期ボランティアを誘致する。2か月でその実人数は50人にのぼる。

3/22

兵庫県灘中学高等学校21名の受け入れを実施。大学生ボランティア6名と共に、防災をテーマにワークショップを実施する。

2013/3



町に人の流れを作り続け、一人でも多くの人と人との繋がりを創り出したいです

「私に何ができますか？」よくこんな質問を他県の方から聞かれます。そこで僕はいつも答えます。「まずは一度来てください。必ず感じるものがあるはず。何が出来るかはそれから一緒に考えましょう。」全世界ではまだまだ多くの方が被災地でのボランティアを希望しています。実際被災地に来て、自分の目で直接見て、現地の方と触れ合っ、一人ひとりが感じ、自分の場所に持ち帰り、情報発信に繋がります。町に人の流れを作り続けること、それこそが被災地の復興に必要なことだと感じます。人と人、人と場所を“繋ぐ人”としてこれからもボランティアのコーディネートに励んでいきたいと思っています。



成宮 崇史
底上げ 気仙沼事務局長

自分が感じたことを、自分がやりたいことを、行動にうつす

「気仙沼の中学生とサッカーしないか?」。先輩からの誘いの言葉が僕の気仙沼、そして底上げとの出会いでした。中学生とのサッカーのチャリティマッチに参加するため、気仙沼を訪れ、気がつけば4週間滞在しました。もちろんサッカーだけでなく仮設住宅を訪れお茶つこの機会をつくったり、小学生と一緒に勉強したり、また、僕と同じようにボランティアで気仙沼を訪れていた東京や関西からの大学生とディスカッション等も行いました。自分が被災地を訪れ、特になにかを成し遂げたわけではありません。しかし、僕はたくさんの人と出会うことができ、充実した日々を過ごしました。そして、色々なものを「底上げ」する底上げの皆さんの姿にはとても刺激を受けました。気仙沼には自分の意識を底上げするチャンスがあると僕は思います。



中馬 一徳
早稲田大学 4年



2



3

プロジェクトの今後

講演活動やイベントでの情報発信を元に、今後もボランティアの誘致に努めていきます。

また、リピーターを増やすことができるように一つ一つの関わりや繋がりを大切に、気仙沼の“今”を伝えていきたいと思っています。

- 1 ボランティアや観光客を対象に、町案内を行う。ただ来て見て帰るだけでなく、そこでどういったことがあり今何が起きているのかを伝え、現状を知ってもらう。@気仙沼市街
- 2 釘などの危険物やごみが散乱している場所にてボランティアとゴミ拾いを行う。歩いて回ることで被災地の現状をより細かく知ってもらうことができる。@気仙沼市南町魚町付近
- 3 ボランティアと一緒に気仙沼の課題や現状に対し何が出来るか考えるワークショップを開催。@気仙沼市内コミュニティスペースなど

学習コミュニティ支援

ソコアゲ

概要

震災後、気仙沼市内では多くの公園や中学校の校庭に仮設住宅が建設され子どもの集まる場所が失われてしまいました。また、仮設住宅の中も子どもが学習をするには十分なスペースが確保されていません。そのような現状を受け、放課後に子どもが自主的に集まり、学習を行ったり、子ども同士または子どもと大学生などのボランティアが交流することができる環境を作っています。現在は市内2か所で週2回ずつ実施しています。

日時：週2回×2ヶ所

場所：鹿折地域コミュニティスペース「サライ」、五右衛門ヶ原野球場仮設住宅集会所、他

参加人数：延べ2196人

2013.1

8/1-8/31

鹿折地区、八瀬地区、階上地区と市内同時3か所にて学習コミュニティ支援を展開する。延べ112名の子どもの参加に加えて、30名以上の大学生ボランティアを誘致することもできた。

10/1

五右衛門ヶ原野球場仮設住宅集会所にて週2回の定期的な学習コミュニティ支援をスタートする。夏休みにも来てくれた子どもが初日より継続的に参加してくれている。

11/1,2

サライで最も参加生徒も多く交流の深い鹿折中学校。NPO法人として鹿折中学校2年生の職場体験の受け入れを行った。

1/6

サライにて「底上げ」主催のもちつき大会を実施。学習コミュニティ支援に参加している子どもと保護者の方にも呼びかけ、多くの地元の方の協力と参加を得ることができた。

1/16

サライにて緊急時の対応確認として避難訓練を実施。保護者の方や中学校、警察にも協力してもらうことができ、その様子は気仙沼ケーブルテレビでも放送された。

2012/5

2013/3



1



2



3

子どもたちの笑顔、そして未来の底上げをするため僕は休学しました

昨年の夏、底上げと出会い、学習支援という活動を手伝わせてもらいました。そこには自分たちの居場所を求めている子どもたちが多くいました。震災後、多くの公園や学校のグラウンドが仮設住宅を建てるためになくなり、今もまともに部活をやれない子が多くいます。そんな子どもたちと多くのボランティアに来てくれる人達をつなげて、楽しく、元気に勉強する。それは単に学校の“勉強”だけではなく、その他さまざまな人と人との間に生まれる“学び”。僕はこれをするために今、気仙沼にいます。これから、僕自身も底上げとして、もっともっと底上げさせていただきたいと思います。「気仙沼の未来とそれを作っていく子供たちと共に...」



矢野 大
高知大学4年
底上げインターン

多くのボランティアと触れ合って、私の意識の底上げとなりました

私が初めてサライに来たきっかけは、友達や太鼓の先輩に誘われたことでした。私は人見知りなので、行く前は正直とても不安でした。けれど、実際にサライに行ってみると、友達が話していたようにとても面白い人たちがいて、楽しい時間を過ごすことができました。サライに来ることで友達と一緒に話や宿題をしたり、学校よりも楽しく勉強のわからない所をボランティアの人たちに聞いて勉強に取り組むことができている。人見知りは変わりませんが、今はもっと多くの人と話したいです。また、もし他の地域で震災があれば自分もすぐにボランティアに行きたいと思えるようになり、自分がとても成長できたと感じています。



熊谷 佳奈
気仙沼市立鹿折中学校
3年生

プロジェクトの今後

コミュニティの場づくり、学習のサポート、ボランティアとの交流とこれまでの形を継続していくことに加え、こども会議のように中学生が自ら考え行動するテーマを設けるなど、子どもの主体性を育てることのできる場所へと発展させていきたいです。

- 1 毎週2回、仮設住宅内の集会所にて学習支援を行っている。仮設住宅に隣接しているため住みをしている大人の方々と交流も生まれている。@五右衛門仮設住宅集会所(毎週月・木曜日)
- 2 学習支援に参加している子どもたちや父兄の方々、地元の協力者を招き餅つき大会を行った。地元の方々への活動報告や交流会の役割も担った。@気仙沼鹿折地区サライ(毎週水・金曜日)
- 3 毎週2回、地元のコミュニティスペースにて学習支援を行っている。どの仮設住宅からも来れるため、コミュニティ再生の場にもなっている。@気仙沼市鹿折地区サライ(2013.1.6)

講演活動

ソコアゲ

概要

震災直後より被災地にて活動してきた経験を活かし、外部の教育機関、企業、イベントにて講演活動を続けています。震災後から今までの町の移り変わり、現状、今後のニーズなどを外部に発信することで、震災教育、若者の意識向上、被災地への人材の誘致を目指しています。実際に大学にて講演した際に東北に興味を持った大学生が気仙沼に来て活動に参加してくれている。

講演実績

埼玉県立大宮光陵高等学校、東京都立野津田高等学校、北海道尚志学園高等学校、福岡県立修猷館高等学校
気仙沼私立東陵高等学校、私立灘高等学校、白百合女子高等学校、ベトナム貿易大学、佐賀大学、中央大学、聖心女子大学
北海道工業大学、立教大学、早稲田大学、東北大学、同志社大学、東北福祉大学、青山学院大学、一橋大学、兵庫県立大学
他多数

2013.1

2012/5

5 / 12

愛知県豊田市で行われた復興支援イベント美人伝心にて講演を行った。東北出身の大学生も招き震災当時の話もした。

12 / 7

ハワイ大学にて20名の学生、先生を対象に講演した。気仙沼出身の大学生と支援に対する感謝も伝えた。

1 / 9

2012.5月から半年間、当団体で活動していたインターン花原。彼が母校早稲田大学にて500名の学生に東北で得たものを伝えた。

3 / 7

日清製粉グループの方々に気仙沼をご案内したことが縁で、同社東京本社にてお話をした。

3 / 31

九州大学生が中心となって復興支援を続ける学生団体「このゆび」。400名以上が参加した彼らのイベントにパネリストとして参加。

2013/3



1

一歩を踏み出すために東北からできること

震災直後から刻一刻と変わる現地のニーズをつかみ、2011年7月から始めたこの活動。東北への関心が薄れ始めたことに危機感を感じ、少しでも現地の生の声を発信しようと考え自分の母校など身近なところから講演を始めた。初めのうち手探りで教育機関へのアプローチの仕方わからなかったが、試行錯誤を繰り返してやっていた中で、外部の人たちも東北の情報を欲していることを強く感じ活動を続けてきた。さらに講演を聴いて気仙沼に来てくれる方々も増え、新しいことにチャレンジしていく学生も多く生まれている。こうした講演を聴いてくれた人たちの“小さな一歩”の踏み台になれていることにも大きな意味を見出している。



さいとう 祐輔
齊藤 祐輔
底上げ 副理事長

休学という決断が僕にとってのターニングポイント

いつも周囲を言い訳に、考えを行動に移してこなかった（復興支援もその一つ）これまでの生き方と決別したい。そんなことを考えていた時に、友人に誘われ参加したNPO法人底上げの講演会。気仙沼の現状が自分の認識からあまりにもかけ離れたものであり『少しでも復興に向け力添えしなければ』と思うと同時に、『自分の思いに素直に行動する』矢部さんに魅かれました。そして休学し気仙沼へ。そこでは、『周囲ではなく、自分が何をしたいのか、何ができるのか』を考える必要がありました。また、『自分の思いに素直に行動する』底上げのメンバーや地元の高校生たちは、僕にとって非常に大きな存在でした。その中で、いつか僕は考えを行動に移す人間になっていました（笑）



はなばら 遼
花原 遼
早稲田大学 4年
底上げインターン



2



3

プロジェクトの今後

講演を機に気仙沼に来て人や底上げのインターンとして活動した大学生など、能動的に動く若者を東北に巻き込むことは復興のための大きなファクターになり得ます。そうした学生を誘致するため、授業に入り込んで長期的に情報を発信していきたいです。

- 1 豊田で活動するSWT+(当時はSWT48)の協力を得て豊田市内の小中学校を講演をしながら回る。@愛知県豊田市 (2012.1.16)
- 2 東北から遠く離れた島根県でも講演。復興支援にあたる協議会が講演イベントを主催、招待して頂き、現地の現状や課題について話す。@島根県松江市 (2012.1.8)
- 3 大学内で講演後、身近にある社会問題について考えるワークショップを開催。@岩手県立大学 (2012.7. 4)

子ども会議

ソコアゲ

概要

自分たちの町のために何かしたい、子どもの声をもっと町づくりに反映させてほしい、若者にとって魅力のある町づくりをしたい。そんな子ども達の思いを受け、底上げは「子ども会議」を立ち上げました。子ども達が思いを共有し、形に変えていくべく、月に2回ほど集まっています。これまでの「子ども会議」を経て、現在は地元の子供たちが、大学生団体「底上げ Young」、高校生団体「底上げ Youth」を自ら結成し、被災地のために主体的に活動しています。底上げは子ども達のサポートとして共に活動しています。

日時：月二回程度

場所：cadocco、コミュニティスペース「サライ」、紫会館、底上げ事務所

参加人数： 大人 延べ人数：204 子ども 延べ人数：285

2013.1

10/14

子ども会議発足！「観光」をテーマに2グループに分かれ話し合いをスタート。自分たちの知っている観光スポットをお互いに共有した。

12/27,28

東京都田園調布双葉女子高等学校・兵庫県灘中学高等学校への、地元高校生による町案内を実施。その後、話し合いのワークショップを行い各グループの思いを共有した。

1/12

「底上げ」の発表会にて、子ども会議より誕生した高校生団体「底上げ Youth」として、これまでの活動内容と広報物を発表した。

2/15

市内にある鹿折中学校の授業内で子ども会議を実施した。「底上げ」と「底上げ Youth」のメンバーがファシリテーターとして話し合いを進行した。

3/24

「恋人」発祥の地、煙雲館の紹介リーフレットをラブストーリーにして制作した。地元の方85名を対象に寸劇を交えた発表会を実施。その後底上げ Youth の活動は大きな反響を呼ぶ。



1

少しずつ、一歩ずつ、地味だけどとても大切なこと

彼女たちは、だれにお願いされたわけでもなく、誰に言われたわけでもなく、「自分のまちを良くしたい」と強く願う集団である。NPO 法人底上げは彼女たちへ選択の幅を提示し、外部から刺激を与える程度である。彼女たちは本気である。だから僕たちも本気で彼女たちと向き合い議論する。本気だから共に涙し、共に笑い、共に考え、共に行動する。時には立ち止まり悩まされる。しかし、そのプロセスが重要で、彼女達の成長の糧になっている。彼女たちの背中をみて、気仙沼の大人たちも「がんばろう」と思う。そんな良い循環になっている。これからの気仙沼を担う若者こそ重要であり、現在 NPO 法人底上げが力を注いでいる活動のうちの一つである。



矢部 寛明
底上げ 代表理事

私たち高校生だからこそできるまちづくり

私が底上げと関わるようになってから、子どもでも意見を言えることを知りました。自分が生まれ育った気仙沼。しかし、私はどこか気仙沼に不満を抱いていました。そんな中底上げと出会い、話をしていく中で、自分も町の一員として声を上げていいのだと実感できました。今は気仙沼に住む高校生と「底上げ Youth」を結成し、よりよい気仙沼にするための活動を行っています。高校生目線の新しいアイデアを出し合い、どう実行させていか話し合うことは楽しくて仕方ありません。私は子ども会議を通して、より気仙沼が大好きになりました。今後も底上げを通して出会えた仲間と、さらに活発で熱いまちにしていきたいです。



三浦 亜美
気仙沼高校3年
底上げ Youth 代表



2



3

プロジェクトの今後

子ども達が主体的に話し合い、活動していくことのできる場所を増やし、そのサポートに努めていきます。楽しい場所となることを第一に、小中学生も集まる環境作りを行っていきます。

1 子どもたちと気仙沼について考える会を重ねていく中で、地元高校生が学生団体底上げ Youth を立ち上げた。@気仙沼市南町 (2012.10.14)

2 外部からの観光客を誘致するため観光ツアーを提案。@気仙沼市市民会館 (2013. 3.24)

3 子ども会議での活動を底上げの活動報告会にて発表。気仙沼での活動を報告するとともに、高校生のモチベーションを高めた。@埼玉県朝霞市底上げ活動報告会 (2013.1.12)

地域振興

ソコアゲ

概要

長期的に気仙沼に滞在することによって、ありがたいことに地元の方との繋がりが深まってきております。その関係の中で気づいたことは、私たちがプロジェクトとして行っている活動以外にも、実に多くのニーズが市内にはあるということです。人と人の繋がりを大切に、少しでもそのニーズに応えていくべく、個人または団体を対象に、活動やイベントのお手伝いをさせていただいております。

日時：随時

場所：主に気仙沼市内

参加人数：不定

2013.1

9 / 16

第17回目黒さんま祭りに焼き手として参加。目黒区に実家がある成宮は、目黒から気仙沼に住民票を移し、気仙沼市民として目黒へさんまを焼きに行った。その様子は翌日全国新聞に取り上げられた。

10 / 5

階上地区の伝統的な塩作りの再興のお手伝いを開始。竈作りから始まり、海水を汲む作業、薪割り、体験希望者の受け入れなどを行う。今後も定期的に協力していき、地域を盛り上げていく。

10 / 6

昨年に続き、ボランティアと共に羽黒神社の神輿担ぎをする。震災後の人数不足で一時は中止も考えた神輿担ぎ、若き力での盛り上げ要員として参加させていただいた。

10 / 15

地元農家のお手伝い開始。土地はあるが人手が足りず、協力を求めている農家のお手伝いを定期的に始める。多くのボランティアが参加している。

2 / 17

第26回天旗祭りの実行委員を務める。当日は多くのボランティアと共に、運営の手伝い、祭り全体の盛り上げとして実行委員を務める。底上げも「底」と書かれた凧を天高く舞い上げ、底上げを行った。



この町に今必要なものは、嵩上げ、水揚げ、旗上げ、盛り上げ、底上げです

被災した子ども達は毎日どのような気持ちで過ごしているのか、震災後そのことがとても心配でした。少しでも早く子どもが外で笑顔に遊べるようにと願いを込めて伝統的な天旗祭りの継続を決めました。今年为天旗祭りでは、実際多くの子どもの参加も見られとても楽しんでいました。凧上げの一番良い所、それは年齢、性別、国籍関係なくみんなが同じ空を眺めること。空を見上げている人は自然とみんな笑顔になるんです。大変な時だからこそ、下を向かずに上を向いて、笑顔で楽しく気仙沼の人達の気持ちを上げていきたいです。これからも底上げの若い力を借りて、天高く旗を上げ続け、一緒に町の人の気持ちを底上げしていきたいと思ひます。



加藤 斉克
気仙沼凧の会代表世話人

海と生きる、その意識の底上げが気仙沼にとって大切な事なんです

気仙沼の人はみんな大好きだった、岩井崎で作った遠藤伊勢治郎さんの塩。ただ、残念ながら遠藤さんは津波で亡くなってしまいました。今は何とかその意思を受け継いでいきたいと塩作りを再興しました。ここ階上地区も津波で大きな被害を受けましたが、前を向いて頑張らないと何も始まりません。岩井崎の観光の再生としても、綺麗な景色を見るだけでなく塩作りの体験を通して人と人との出会いを作り、リピートに繋がるよう心がけています。底上げのみなさんにもかまど作りや薪割り、水汲みなど手伝ってもらい、何より楽しそうに行う姿を見てエネルギーをいつももらっています。これからも気仙沼のために美味しい塩と一緒に作っていきましょう。



辻 隆一
階上観光協会会長

プロジェクトの今後

これからも多様化していく多くのニーズにも応えていき、少しでも気仙沼全体が盛り上がるような働きかけをしたいです。直接協力することに加え、ボランティアや他の団体を地域と結ぶことでより新たな形での支援を継続して行っていきます。

1 第26回を迎えた気仙沼天旗祭り。震災以降見送られていた中執り行われた第26回。実行委員にも所属し地域を再び盛り上げるため運営のお手伝いをした。(2013.2.17)

2 気仙沼の地元農業団体 VOARLUZ の活動に協力。農作業やボランティアのマッチングを行った。

3 伝統的な塩作りの再興の手伝い。津波の被害を受けるも、再び立ち上がる地元の方の協力を行っている。竈作りや水汲み、薪割りなど一から手作りの体験を行った。@階上地区

イベント

ソコアゲ

概要

気仙沼内外での活動によって様々な方と出会い、イベントに参加する機会を数多くいただきました。イベントはたがいに盛り上げ刺激し合い、また日常生活から離れて、普段忘れていた大切な事について考えてみる場所です。そこで出会った方々にはたくさんの応援の言葉やご寄付を頂き、底上げからは復興へ向けて活動する人々のエネルギーと感謝の想いを伝え、東北へ意識を向けていただくための大切な機会となっています。

2013.1

2012/5

5/12,13

愛知県豊田市山之手小学校にて、「美人伝心フェス」に参加。講演やブース出展を行う。

6/1~6/30

都内にあるワインバー「11plat(オーンズ・プラ)」にて写真展「気仙沼と、人の集い」を開催。

7/15

埼玉県朝霞市の保育園で開かれた「蓮祭2012」にて、手打ちうどん店を出展。

7/27~29

新潟県苗場スキー場で行われた「フジロック2012」NGOvillageにブース出展。

8/11,12

「気仙沼みなとまつり」にて、多くのボランティアや地域の方々と共にチーム「エクセレンテ！」として出場。

12/5~9

ハワイで開催された「JAL ホノルルマラソン2012」のEXPOにブース出展。マラソンとレースデーウォークにも参加。海外へ、支援に対する感謝と東北の現状を伝える。

2013/3



美人伝心フェス



FUJI ROCK FESTIVAL 2012



JAL ホノルルマラソン 2012 EXPO



気仙沼みなとまつり

愛を知る県から LOVE ACTION!!

“愛知にいてもできることがある”という想いが動機となり、愛知県にて女性活動団体を立ち上げ、“愛知と気仙沼を繋ぐこと(隣町&友達に)”をコンセプトに活動を開始。2012年5月には、愛知県豊田市の小学校で復興支援フェスを開催しました。このフェスでは気仙沼の大学生による座談会やキャラクター交流、防災学習、底上げへの活動車贈呈、気仙沼の方へお手紙を書く“お友達プロジェクト”等を実施。43店の出店者、スタッフ150人、1000人以上の来場者が集まる大きなイベントとなりました。また7ヶ月に渡り開催したイベントでは103万円の収益が上がり、その全額を気仙沼の仲間達の活動資金として贈りました。時間の経過と共に支援のカタチも、もちろん変わる。震災の影響をほとんど受けなかった愛知で3.11の経験を活きたものとするために、今後も“出逢いと再確認のきっかけ”を提案&実施し続けます。

愛言葉はそう、『愛を知る県から LOVE ACTION♡』



前田 祐佳
SWT+ 代表

美人伝心フェス (写真1)

愛知県豊田市山之手小学校にて行われた、愛知県の被災地支援団体「SWT+(元SWT48)」主催のチャリティイベント。

写真展「気仙沼と、人の集い」

NPO法人「Good Day」主催の企画展「ソーシャルアーティスト展」第二回目ゲストとして出展。会場となったワインバーは、飲食という日常の場から社会問題へ目を向ける活動に意欲的に取り組んでいる。

蓮祭り2012

仕掛け屋本舗「アトマンモス」主催。「おとなも子どももハダシになって」をコンセプトに、雑貨販売、飲食店、ワークショップ、ライブなどを行った。

気仙沼みなとまつり (写真4)

航海の安全と大漁を祝う気仙沼地方最大の祭り。花火大会、街頭パレード、市民らがチームを組んで参加する「はまらいんや踊り」などが行われる。

プロジェクトの今後

「被災地を忘れない」ということは簡単なようで実はむずかしく、そして大変重要であると感じます。今後もイベント出展を通してその大切さを伝えると共に、より多くの方々へ向けて、東北復興への意識を底上げをしていきたいとおもいます。

農業

ソコアゲ

概要

東北復興支援の田んぼづくりをしようとしていた有機農家の仲澤先生、NPO 法人メダカのがっこうとのご縁をいただき、栃木県茂木町にてお米作り挑戦しています。当初は「東北支援米を作る」目的のもと活動を始めましたが、東北の状況やニーズの変化にともない「農業を通じて、食の意識を底上げする」という、底上げとしての新たな試みへと変化していきました。農作業体験を通じた「農業」・「食」への関心と、継続的な活動による参加者間のコミュニティが育まれる事が期待されます。

日時：主に毎週末

場所：栃木県茂木町

参加人数：延べ285人

2013.1

5/20

第1回 底上げ田植え企画。約1反5畝の田んぼを、5月20日・6月16日の2回に分けて田植えを実施。約40名が参加。参加者のほとんどが、田植え初体験。

5月～8月

毎週、除草作業を実施。草が小さいうちは、竹箒除草という農具を使用していたが、夏になり草が大きくなると全ての草を手で取らなければいけない。無農薬有機農法には、このような苦勞が伴うものなのかと体感する。約35名参加。

10/20

底上げ農業部 富永めい茂木滞在開始。有機農業の勉強を始める。夜型人間だった富永が、「朝早く起きる」という生活時間にするだけで苦戦する。とにかく「孤独」と戦う日々。

11/17

池袋にて、収穫祝いと農業部活動報告を兼ねた「底上げ米収穫祭」を開催。お米作りに関わった方々を中心に呼びかけをし、約25名が参加。自分が関わったお米を食べる喜びを体感。完成したものをいただくだけでなく、そのプロセスに関わることの大切さを学ぶ。

1月～4月

10年ほど放置されていた田んぼを開墾。水路作り、あぜづくり、除草作業、田んぼにかかる木の伐採作業をおこなう。総勢20名で作業をしたことも。1月～4月にかけて延べ90名参加。



1



2



3

農業と人が繋がる場所。人と人が繋がる場所。そんな役割を深めたい

私は、有機農業の先生のご指導のもと、農業の勉強をしながら、今年の1月より毎週末農作業体験を企画しています。当初は、初参加者ばかりだったこの企画が、「またきたよ〜！」という何度も参加してくれる方がどんどん増えてくるようになったり、「この企画に参加するようになってから、ごはんを残すの嫌になったよ。」という方がいたり、「茂木にくるようになって、新しい人間関係ができてとても楽しい！」「これまで遠く感じていた農業が、すごく身近になってきたよ。」という声をきくようになってきました。企画を始めて4ヶ月、農業と人・人と人のコミュニティが確実に生まれてきていることを感じながら、「この企画を継続すること」「農業の世界を体感していくこと」で、わたしたちの役割をより深めたいとおもっています。



とみなが
富永 めい
底上げ 農業部

これまで非現実的だった“自給自足”が 目標になりました

私が底上げ農業部のイベントに初めて参加したのは去年の稲刈りでした。以前に別の稲刈りに参加したことはありましたが、それは稲刈りだけの単発イベントでした。底上げ農業部が米作りをしている茂木では、有機農業の先生によるご指導のもと、米作りの全てに継続して関わることができる環境があります。どんなお米ができるのかワクワクし、自然と「また来たい」「続けたい」という気持ちが生まれていました。そしてこの一連の作業を通じて、このお米への想いをここで出会った仲間達と共有できることも、本当に楽しいです。将来的には、完璧な自給自足はできなくても、自分のできる限りのお米・野菜作りができるような環境にしたいと思っています。



ながもり 誠
長森 誠
会社員
農作業体験参加者

プロジェクトの今後

体験を通して、農業と人の繋がりをつくります。それこそが「食の意識を底上げ！」の第一歩！ また茂木にて、自給自足の暮らしに挑戦しています。この夏は農業研修の他、自分の野菜づくりをします。自給自足チーム茂木（名前がださい）募集中！！！！

- 9月30日 NPO 法人メダカのがっこうの会員のみなさんと一緒に、総勢25名で稲刈りを実施！約160kgのお米を収穫。
- 2月9日・10日 NPO 法人メダカのがっこう、ツインリンク茂木ハローウッズと共同で、木の伐採作業を行なった。
- 2月23日・24日 味噌作りに挑戦！作る過程のことや、大豆・糀・塩だけでできていることなど、いつも食べているものでありながら、何も知らなかったことを再認識する。

メディア露出

ソコアゲ

2012年

- | | |
|----------------------------|---|
| 5/25 読売新聞「寺子屋 子どもに寄り添う」 | 2/19 支援団体 SWTJ 季刊誌「obi」 — 「子ども達 と共に町づくり考える」 |
| 7/18 気仙沼災害FM—イベント告知 | 2/27 災害 FM—イベント告知 |
| 7/25 東北放送—底上げ紹介 | 3/5 週刊朝日—「被災地に移住した若者たち〜つなぐ人〜」 |
| 8/16 三陸新報—「鉢にヒマワリ」 | 3/6 夕刊フジ—「現地から聞こえる若者の活躍」 |
| 9/6～9/27 気仙沼災害FM—底上げ紹介 | 3/9～3/17 東京ケーブルテレビ itscom— 「気仙沼～この町で生きる～」 |
| 9/17 読売新聞—「目黒から移住『懸け橋に』」 | 3/10 朝日新聞岐阜面—「被災地への笑顔・誓い」 |
| 10/4 高知新聞—「高知大生休学し被災地へ」 | 3/11 朝日新聞埼玉面—「海恐れるより豊かさ伝える」 |
| 12/7 三陸新報—「ありがとう伝える」 | 3/11 高知新聞—「気仙沼で高知大生奮闘 矢野さん1年休学しボランティア」 |
| 12/24 読売新聞—「震災 同世代に語り継ぎたい」 | 3/14 京都フリーペーパー「志縁」—「若い世代の力信じて」 |

2013年

- | | |
|---------------------------|--------------------------|
| 1/4 朝日新聞宮城面—「若手束ね復興『底上げ』」 | 3/14 K-NET—気仙沼未来創造カレッジ |
| 1/10 山陰中央新報—「被災地に足運び考えて」 | 3/21 オルタナS—気仙沼未来創造カレッジ |
| 1/18 神戸新聞—「問題意識持って行動を」 | 3/26 三陸新報—「『恋人発祥の地』ツアー」 |
| 1/18 三陸新報—「地域のリーダー育てたい」 | 3/27 K-NET—底上げ Youth 発表会 |
| 1/18 K-NET—学習コミュニティ支援避難訓練 | |
| 1/22 オルタナS—アショカユースベンチャー | |
| 2/13 K-NET—子ども会議 | |



3/5 週刊朝日



5/25 読売新聞

収支報告

ソコアゲ

I 経常収益

- 1. 受取会費**
 - 正会員受取年会費 3,000
 - 正会員受取入会費 2,000
 - 計 5,000
- 2. 受取寄付金**
 - 受取寄付金 4,149,789
 - 資産受贈益 1,238,000
 - 施設等受入評価益 5,387,789
- 3. 受取助成金等**
 - 受取民間助成金 5,589,448
 - 受取国庫補助金 5,589,448
 - 経常収益計 10,982,237

II 経常費用

- 1. 事業費**
 - (1) 人件費
 - 給料手当 2,071,580
 - 法定福利費 400,000
 - 人件費計 2,471,580
 - (2) その他経費
 - 会議費 78,851
 - 通信運搬費 310,654
 - 消耗品費 275,398
 - 水道光熱費 151,237
 - 旅費交通費 1,460,322
 - 車両支出 606,767
 - 地代家賃 521,302
 - 印刷製本費 61,484
 - 業務委託費 1,230,885
 - 2. 管理費**
 - (1) 人件費
 - 給料手当
 - 法定福利費
 - 人件費計 0
 - (2) その他経費
 - その他経費計 0
 - 管理費計 0
- 経常費用計 7,484,156

当期正味財産増減額 3,498,081
 前期繰越正味財産額 3,498,081
 次期繰越正味財産額 3,498,081
 2012年5月11日から2013年3月31日まで

NPO 法人底上げの活動をご支援ください!

皆様からご支援いただいた寄付金は、復興支援事業、学生教育プロジェクト、交流事業、米づくりプロジェクトに使わせていただきます。

お振込先

ゆうちょ銀行をお持ちの方	ゆうちょ銀行以外からお振込の方
記号 18180 番号 11680621	記号 818 口座番号 1168062

サポーターからの声

ソコアゲ

スタートからずっと見守っています！「底上げ」に集う若者たちの明るい
エネルギーがどれほど気仙沼の人達を勇気づけたでしょう！

これからも「そこから」希望を発信し続けて下さい。 Tokiko

歌手 加藤 登紀子 さん



底上げは、君たちの流儀で、ロシナンテスは、俺たちの流儀で、東北、日本、
アフリカ、そして世界の為に、精を尽くそう！行くぞ！

NPO法人ロシナンテス 理事長 川原 尚行 さん



気仙沼の復興のためにいままでありがとう。

これからも油断すんなよ！

気仙沼観光コンベンション協会会長 加藤 宣夫 さん



これまでの活動を続けてきたことに感慨を覚えます。

これからも若い情熱と行動力で突き進んで下さい。

宮城県ホテル旅館組合 気仙沼支部長 加藤 英一 さん



NPO 法人底上げ 年間活動記録

ソコアゲ THE FIRST ANNIVERSARY

2013 年 5 月 11 日 発行

発行 NPO 法人底上げ
〒 988 - 0023 宮城県気仙沼市南ヶ丘 1 - 2 - 12
TEL : 0226 - 25 - 9670 / FAX : 0226 - 25 - 9670

編集 矢部 寛明 成宮 崇史 斉藤 祐輔

執筆 成宮 崇史 中馬 一徳 矢野 大地 熊谷 佳奈 斉藤 祐輔 花原 諒 矢部 寛明
三浦 亜美 加藤 齊克 辻 隆一 前田 祐佳 富永 めい 長森 誠 海岸 真紀子

レイアウト 海岸 真紀子

印刷 株式会社 プリントバック